

上京 史蹟と文化

2001 VOL. 20



美を創る

西陣紺加工師

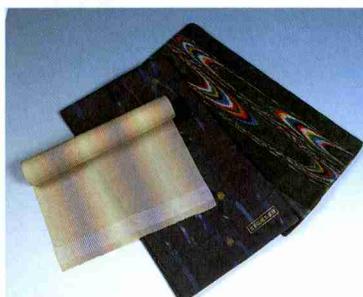
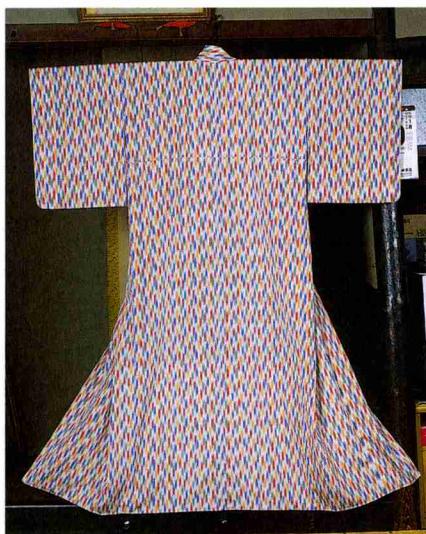
棚 橋 武

たけ

郎

ろう

京都市上京区淨福寺通出水上る



国内各地に地場産業として紺が分布するが、中でも京都の西陣紺のような経糸四千本以上という細い絹を使つた緻密な絹紺は類例がない。防染のために糸をくるくるという基本から数々の技法が生まれ、木綿紺のような庶民生活に根ざした土臭い趣きと異なる洗練された美しさを持つのが西陣紺の特長で、その近代感覚は三宅一生ブランドで服地やネクタイにも応用されている。

西陣機業からの注文による意匠を方眼紙に移した図を基本として、束ねた絹糸に青花で墨打をし、防染の部分に紙を巻き、糸でくるくる。薄い色から順に染めてはほどいて、また巻いてくるくくるという作業が果てしなく続く。織にかかる前段階の作業であるから作品は手許に残らない。記念のために図と糸の切れ端を残されて作品を偲んでおられる。

紺は飛鳥時代の作という太子間道たいしけんどうが法隆寺に伝来し、氏は平成十一年に株式会社矢代仁商店の依頼により、着尺御召による太子間道柄を約一年がかりで完成。その年の秋、京都市伝統産業春秋会主催のみやこめつせにおいて作品展に出品されている。その高度で緻密な技術に先人の優れた技を感心されるとともに、自信作の技にも誇りを持たれている。

氏は伝統工芸士であり、また、西陣紺加工業協同組合の理事長も歴任され、平成六年には京都市伝統産業功労者の表彰も受けられた名工である。年々減少する加工注文に加えて後継者不足もあり、御自身も創業者の父親から受けた技術を次に伝えられない淋しさが隠しきれないようであった。

「上京の史蹟シリーズ」

上京の大路小路

(その2)



大宮通は、その名の通り平安京の大宮（大内裏）の外側の大路でした。現在の大宮通は、北は上賀茂の御園橋あたりから始まり、途中、二条城で途切れながら上鳥羽の鴨川のほとりまで十キロほどの長い道となっています。

しかし、平安京草創当時は一条大路から九条大路まで三十八町、五・七キロほどで、幅十二丈、三六メートルの大路でした。ところが、時代が降りましたがって北は一条を越え、南は九条を越えて街道筋となる一方、道幅は狭まり、両側から侵食されて、食い違つた道となりました。さらに近代の電車の開通や都市計画によって中心街路としての役目が与えられるようになります。さて、上京区内の大宮通はというと、



平安時代にはどの程度の傾斜であったかはわかりませんが、北が高く南に低いという王城の地に相応しい地形であったことはいうまでもありません。

平安時代にはどの程度の傾斜であったかはわかりませんが、北が高く南に低いという王城の地に相応しい地形であつたことはいうまでもありません。

平安時代にはどの程度の傾斜であったかはわかりませんが、北が高く南に低いという王城の地に相応しい地形であつたことはいうまでもありません。

その北端は北大路大宮から一四〇メートルほど南へ行つた今宮神社の御旅所のところから始まります。その西向かいの若宮神社も、東隣の玄武神社も共に北区に属します。このあたりの道幅は一〇メートルほどあります。昔はもっと狭く、しかも直線ではなかつたと思われます。この姿は近代になつて拡幅されたことを明らかにしています。

ここから南へ向かつて歩いてみましょう。このあたりは商店街の賑やかな飾付も見られ、少しずつ下り坂であることに気付きます。御旅所の付近で海抜六七メートル、南端の丸太町通りで四一メートル、その間二・五キロで標高差二六メートル、一〇パーセント（千分の一比）ほどの緩い傾斜です。

大宮芦山寺上ルに「大宮頭交番」があります。最近あまり使われなくなつた「頭」の地名が残つているのです。室町頭、新町頭、堀川頭、大宮頭、千

花にまつわるエピソード…
季節も添えて演出します。

FLOWER OFFICE
花工房
花キューピット 62-071

全国どこへでもお花をお届けいたします。
京都市上京区烏丸通今出川下ル ☎ 602-0903
TEL 075-414-8700 (代) FAX 075-414-7787



通の北端を頭といいました。だいたい寺之内は豊臣秀吉が寺町とともに寺を集めて市街の境としたところで、それより北は畠地でした。この大宮通

には街道筋の鞍馬口、寺之内、今出川、元誓願寺などを除いて一条までに直交する横通がありません。これらの道は東西を結ぶ街道といつてよく、たいていの道は丁字形に行き止まる短い団子（辻子）で、縦の街道筋をつなぐ役目を果たしており、あみだくじのような姿をしています。これは横通の街道筋にも見られます。観世団子、紋屋団子、石屋団子などは代表的なものといえましょう。



大宮通には質の高い西陣の町家が数多く残っています。歩いていて紅殻格子や虫籠窓を見かけると何かほっとするものを感じさせられます。西陣織を商うお店であったり、織屋さんであったり、今も昔ながら姿を留めているのは当然ですが、すでに住まわれなくなつた町家を新しい用途に転用して保存されているところも目立ちます。

その中に一昨年十一月、国の登録有形文化財となつた町家が二つあります。その一つは大宮元誓願寺下ル二丁目の石薬師町の西側にある富田屋です。大宮通に面した主屋は瓦葺の二階建、明

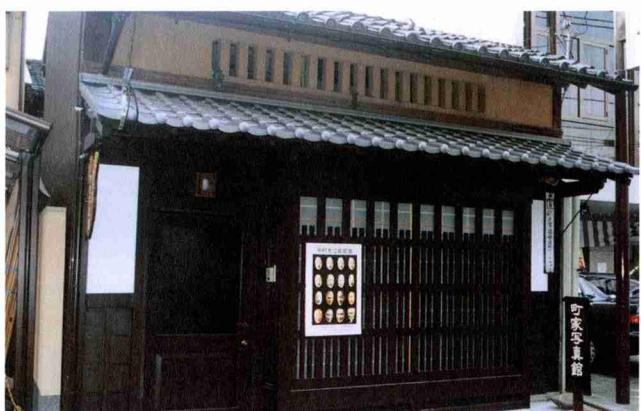
治時代に建てられた織物問屋の店舗兼住宅で、西陣における大規模な商家建築の好例とされ、同じ時代の表蔵、中蔵や、昭和十年代の離れ、宝蔵が加わって京都の商家の屋敷構えをよく伝えています。



富田屋

また旧西陣小学校の東南隅を南へ入った藤木町（上立売大宮東入下ル）にある佐々木家住宅は、江戸時代後期の京都町家の姿を伝える数少ない遺構で

さらに、この付近には町家工房とか町家再生工場など町家を作業場に活用しているものや、ギャラリーとして再生した水野町家写真館なども見られるようになりました。



水野町家写真館



中立売裏門の西南角に、「此附近聚楽第址」の石標が立っています。聚樂第は豊臣秀吉が天正十五年（一五八



七)に造営した関白の公邸宅で、大内

裏の旧地である内野を利用して建造しました。その遺跡は養子秀次の失脚後、

その居城であったところから徹底的に破却され、しかも市街地の下に埋没し

てきませんが、近年、点々と遺構が発見されつつあります。北は一条、東は堀川、南は二条、西は千本とする説や、北は一条、東は大宮、南は丸太町、西は千本とするなど諸説があります。



平成四年には、中立壳大宮角の西陣公共職業安定所の改築工事に伴う発掘で、東堀と思われる遺構から大量の金箔瓦の破片が見つかりました。また、一条通の北、大宮通と智恵光院通の間、榮町と鏡石町の境界線が三メートルほどの段差となり、石垣が築かれています。これも聚楽第と何らかのかかわりをもつのではないかという説も出でてい

もう一つ、聚楽第の名残りとされるのが、大宮通下長者町上るにあつた梅雨の井です。民家の裏にあつた八雲神社の井戸で、聚楽第図屏風にも描かれており、秀吉が茶の水に用いたとも伝えられ、地上にある唯一の聚楽第の遺構とされてきました。ところが、八雲神社は平成二年一月に地上げに遭い、地元の方々の努力も空しく社殿とともに

ます。

このほか付近一帯には聚楽第に因むと思われる町名が見られます。東堀町は名の通り東の堀であり、須浜池町や

須浜町は池の洲浜によると思われ、天秤町・天秤丸町・秤口町は本丸に接した天秤丸や天秤堀、山里町は山村の風景にした山里という庭園、小大門町は外廊の通用門、亀木町は園地に置かれた噴泉用の木製の亀など、形を残さない聚楽第の名残りといえるでしょ。



も破壊されて、荒れはてた状態になつてているのは、全く惜しいことです。

大宮通の西側は平安宮ですから、二町毎に四ヵ所の門がありました。上長者町通に上東門、出水通には陽明門、櫛木町通には待賢門、二条城の北側には郁芳門がありました。上東門は土塀に入口をくりぬいたところから土御門といいました。あとの三つは、もともと警備を担当した氏族の名がつけられていたのですが、平安宮ではそれを漢字二字に書き換え、山氏の門を陽明門、建部氏の門を待賢門、的氏の門を郁芳門と名づけたのです。南・西・北側の九門にも同様に命名されています。これららの門の遺構は未だ発見されてなく、地中深く礎石や基壇が残されているはずですから、将来の発掘に期待したいと思います。

下長者町通で東へ食い違ったあとは、道も細くなり、静かな住宅として「うなぎの寝床」の民家が軒を接しています。そのはるか先に見えるのは一条城の石垣と松です。

耳鼻咽喉科

鈴木医院

〒602-8241 京都市上京区中立壳通堀川西入

TEL (075) 441-0675



中立壳通
堀川通

■診療時間

月・火・水・金
午前9:00~12:00
午後4:30~ 7:30
土
午前9:00~11:30まで
●休診 木・日・祝

地域社会に貢献する

大阪陸運局自動車整備認証工場
株式会社 土田モータース
有限会社 ツチダエーゼン

京・上・烏丸通寺の内上る647 〒602-0898 TEL(075)431-8121(代表) FAX(075)441-9159

上京の埋蔵文化財

迎賓館建設予定地の発掘調査

発掘調査の経過

京都御所の東側、ゲートボール場、運動広場が設けられていた一角に、京都御所の西側に京都御所があること

から分るよう、江戸時代ここには公家衆の屋敷が建ち並んでいました。当然、それらの調査が必要なことも事前に予想されました。

本格的な発掘調査は平成十年（一九九八年）三月から開始しました。最初に北西部から開始（第一回調査）、北東部で第二回調査、南西部で第三回・第四回調査を実施するこ

ととなりました。

調査地を公開し、多くの方々に見学いたしました。また、この他にも様々な工事が付随しますので、それらに伴う調査も本年一月から本格的に始まりました。

調査地の歴史的な環境

調査地は平安京の北東隅、条坊名でいいますと左京北辺四坊の五・六・七・八町に該当します。ここは南北方向の

四回調査、南東部で第五回調査、中央部で第六回調査と、順次進めてきました。平成十三年一月現在、第五回調査地は終了を迎えつあり、第六回調査

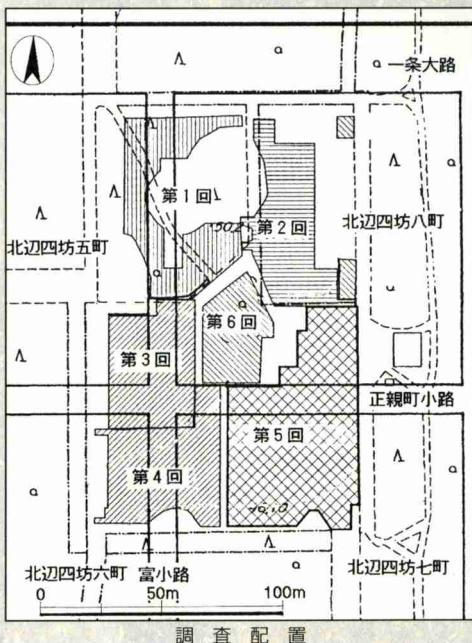
地も江戸時代から室町時代に調査が移りつつあります。昨年末には第五回調査地を公開し、多くの方々に見学いたしましたところです。また、この他にも様々な工事が付随しますので、それらに伴う調査も本年一月から本格的に始まりました。

明治二年（一八六九）、天皇が東京に移ると、公家衆もそれに従つたので

公家町は荒廃しました。そこで明治一〇年（一八七七）から数年かけて整備され、現在見る京都御苑の景観が形づくられました。昭和二十四年（一九四九年）からは国民公園となり、市民に開放されています。



建設予定地の位置（「京都御苑案内図」より転載）

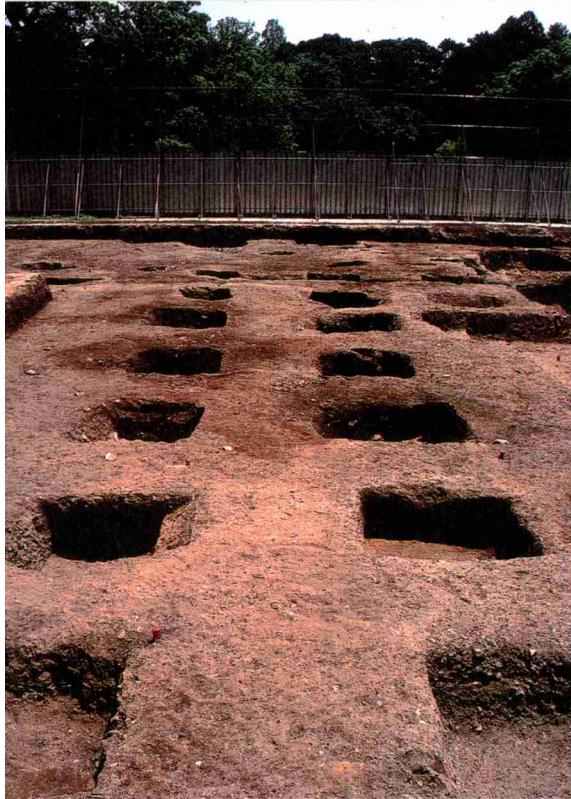


調査配置



調査前の景色（ゲートボール場を北西から）

昭和御大典の遺構



饗宴場の基礎

発掘調査では、時代の新しいものから検出されますので、まず最初に昭和三年（一九二八）に行われた昭和天皇の即位大礼（昭和の御大典ともいう）の時に建てられた饗宴殿の遺構から説明します。これは調査地の南西側にあって、運動広場が「饗宴場広場」と呼ばれるようになつた由来の建物です。調査ではコンクリート製の基礎と梁を検出した。基礎の間隔は三・六メートルで、建物東面には二〇個の基礎がありました。饗宴殿の規模は「四十間四方」と記されていますので、検出します。

公家町の遺構

同時代に製作された絵図によつて知ることができます。それによりますと、調査地は中筋通と二階町通にはさまれた一角で、「富小路家」「園家」「柳原家」「櫛筈家」が南北に並ぶ辺りと推定されました。ところが、絵図を時期ごとに比べると、「宝永五年の大火」「宝永度の内裏造営」（とともに一七〇八年）の前後で屋敷配置が大きく変化しています。火災前、ここには東西二列の屋敷が配置されていましたが、火災後は東西がひとつとなり、先の四家が並ぶことになりました。市中を焼き尽くした大火の直後だつただけに、

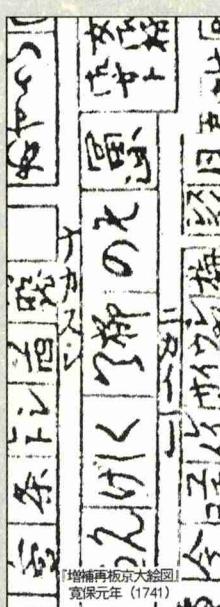
防災上の観点から屋敷と道路が広く取られたのでしょうか。この時の屋敷配置が、幕末まで続きます。

「柳原家」「櫛筈家」が南北に並びます。地の北半では石垣を東西に検出しました。これが富小路家と園家の境界にみられます。同様に、その南六〇メートルでも溝と柵を検出しました。溝には石垣があり、改修跡もあります。こちらは園家と柳原家の境界とみられます。

実際に発掘調査を行うと、江戸時代の遺構は予想どおり古い配置と新しい配置が重複した状態で検出されました。そこで、宝永大火後の遺構を「江戸時代後半期の遺構」、大火前の遺構を「江戸時代前半期の遺構」に二分して発掘しました。こう考えると、遺構の重複は絵図の変遷と矛盾しません。

まず江戸時代後半期の遺構ですが、

絵図では北から「富小路家」「園家」



江戸時代絵図での建設予定地

第三回調査地の南端で池を検出し

一角に造られた庭園の一部です。池の南四メートルで溝と柵を検出しました。柳原家の南限、櫛筈家との境界です。

このように、各家の境界には柵や石垣をもつ溝があつたことが判明したのです。

第二・五回調査地では南北の道路遺構を検出しました。これが絵図にある二階町通です。道路幅は約一五メートルあり、路面には礫が敷かれています。

た。その両側には石組をもつ溝もありました。この二階町通は、東にあったものが宝永大火の後ここに移ってきたもので、その様子は絵図に描かれたとおりです。



二階町道（北から）

「ぜんち院家（禪知院家）」「安祥寺御門跡」「柳原家」「御室御所御里坊」が並んでいました。西側に比べ東側の区画が狭いことが注意されます。なぜ敷地の真中で背割りしなかつたのでしょうか？その理由も調査で判明しました。（内容は以下のとおり）

この時期も、各家の境界は柵と溝で限られていきました。第一回調査地の北半、後半期に富小路家と園家の境界であつた場所は、そのまま千種家との境界でもありました。その南三〇メートル付近には柵があり、この間が千種家とみられます。柵の南で前半期の園家の建物を二棟以上検出しました。第三回調査地の南半には礫敷の通路があり、清水谷家と柳原家を区切つていました。柳原家と櫛笥家の境界にも溝・通路・柵がありました。櫛笥家は調査地の南北隅にあります。この家では、中筋通に面して長屋門を置き、その奥に数棟の建物が並ぶ様子がわかつてきました。

次に江戸時代前半期の遺構ですが、絵図では中筋通と二階丁通間に南北の境界線をはさんで屋敷が二列に配置されていました。屋敷が背中合わせの状態を「背割り」といいます。背割りの西側には「富小路家」「千種家」「園家」「清水谷家」「柳原家」「櫛笥家」があり、東側には「正親町三条家」



園家の建物

後半期の柳原家について

ここまで調査してきた中で、最も状態が判明したのが後半期の柳原家の遺構です。これは第三・四・六回調査地に該当し、敷地全体を調査したため復元が可能となりました。その一端を紹介します。

柳原家は日野家の庶流（分家のこと）で、家格は名家に属します。江戸時代には二〇二石を有し、前期には資廉、中期には光綱が「武家伝奏」（武家の奏請を朝廷に取り次ぐ役職）に就き、中期の紀光は『続史愚抄』という歴史書を完成させました。幕末期の光愛は公武合体派の公卿として活躍し、明

治新政府においても前光が政府の要職を占めました。

第三回調査地では建物・竈・集石・井戸と能舞台・池を一体的に検出しました。能舞台の存在は、口を斜めに据えた七基の甕から想定したものでした。

口を斜めに据えるのは、音響効果のためといわれます。しかし、建物の礎石はまったく残されておらず、能を鑑賞する場所（見所という）や、舞台と樂屋を結ぶ橋懸りもよくわかりませんで

した。橋懸りは、通常舞台の斜め後方に付くのですが、ここには池があるため屋敷側に折れていたと考えました。連続していました。池への導水は西から石垣をもつ溝で行います。池と溝は三時期の改変があり、最後の時期は能舞台が設けられたため、溝は舞台の北西から折れながら池に達することになりました。

最後の池は、底を漆喰で塗り固め、魚寄せの凹みや水門を造り、水を東へ排水していました。排水部には礫敷を敷き、漆喰塗りの円形槽も下に掘られました。東には中島をはさんで全周する池があり、ここには踏石や竹の生垣跡も残されていました。東端は調査区をまたぎ、再び漆喰塗りの小規模な池が

造られていました。

ところで、焼土、焼瓦を大量に含んだ穴の一つから、柳原家の家紋である「鶴」のレリーフを取り入れた大棟の飾瓦（獅子口）というが出土しました。この上面には「明和八稔（年）卯霜月吉日」とヘラで文字が彫られており、明和八年（一七七二）に家屋が新築されたことを知る資料となりました。柳

原家を含めた一帯は、宝永五年の大（一七〇八）で被災したことでしょう。そうすると、明和八年の新築は宝永大火から数えて六三年目となり、この時は建物の老朽化などが原因で新築されたりとみられます。しかし、この時の建物は天明八年（一七八八）の大火で焼亡したようで、これは同じ穴から大量の火災遺物が出土したことからうかがえます。天明大火後的新築では、屋敷の西端に能舞台が加えられました。この時、池の仕組みや導水路に手直しが加えられたことは、先述したとおりで

す。

家屋の変遷を考える上で注目すべき遺物として、第三回調査で出土した地鎮具（賢瓶）があります。賢瓶は密教用の祭具で、家屋の新築時に土地や建物の安泰を祈願する地鎮具として用いられました。「五宝、五穀、五香、五薬をいれ、水で満たし、花を挿して蓋とし、顎に布をもつて莊嚴とする」とされるように、内部に宝物を納め、加持祈祷して地中に埋納されました。出

土時の賢瓶は、石の上に立てられ蓋は固く閉められていきました。蓋を開けると内部から、玉類（象牙・真珠・水晶）や金箔、米・麦・胡麻などの穀類、紙包みの固まり（五薬か）が、水（香水とみられる）と混じり合った状態で出てきました。

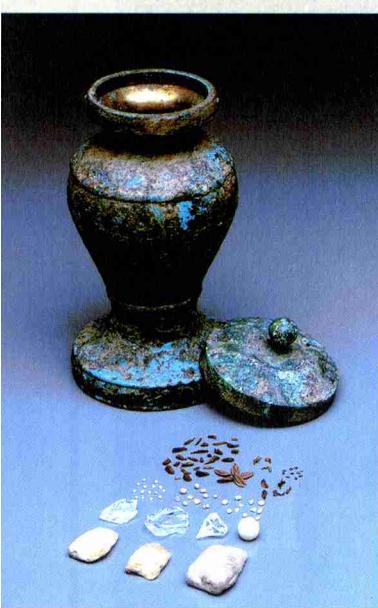
ま と め

江戸時代の公家町は、絵図によると前半期と後半期で屋敷配置が大きく異なっていますが、実際の調査からもそのことが確認できました。各家の配置については、屋敷の広さ、境界施設の状態、家紋瓦の出土、墨書き土器などから、絵図に描かれた配置と一致することも分りました。

各家では、礎石建ちの建物以外に、井戸、石組（井戸に類似するが底の浅いもの）、石室（石組の地下倉庫）なども、京跡についても、密度は少ないものの井戸や道路があり、東北隅の宅地利用の様子が判明してきました。このように、上京区域東端の様子がかってない広さで判明してきました。そのいずれもが、京都千年の歴史を示す具体的な姿であります。



柳原家の池



賢瓶と内容物

あわせまつり

京都まつりの前日祭として、上京区民ふれあい事業実行委員会が主催する「第十回上京区民ふれあいまつり」は、十月二十九日に元成逸小学校を会場として開催されました。校庭には翌日の京都まつりに参加する山車を中心に、模擬店が店開きし、ステージでは数々の演技がくりひろげられ、校舎の中では各種団体や区内の行政機関の展示をはじめ、いろいろな催しがくりひろげられました。五千人の区民が秋の午後を楽しく過ごしました。



京都まつり

十月二十九日、御池通りで展開される都大路パレードに、上京区民隊は「平成の陰陽師 安倍晴明」をテーマに、山車によるパレードをくりひろげました。平安時代、一条戻橋に式神を閉じこめ、妖怪などを操ったといわれる晴明に因み、それぞれの姿を象った扮装で山車を曳き、まわりを囲み、上京区らしさを強調しました。

今回の山車や衣裳はすべて区民のアイディアと手作りで、過去六回の上京区隊に見られない新しい試みに、沿道の観衆の大きな拍手を受けました。

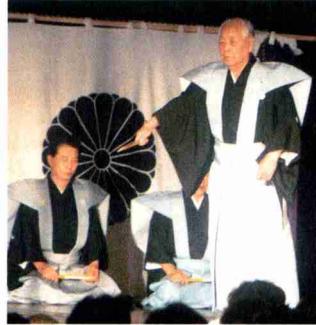


よ京区民

三十六回目を迎えた上京区民薪能は、九月二十一日に白峯神宮を会場として行われました。

昨年、一昨年と雨のために河村能舞台での公演となりましたが、三年ぶりに本来の薪能となりました。

午後四時、第一部として上京区民による舞囃子、仕舞、日本舞踊、琴の演奏から始まり、六時からは第二部となります。火入式につづいて、舞楽「拔頭」、宮城社・麻ノ会の琴「秋の初風」の演奏に始まり、観世流・金剛流による仕舞十一番、河村晴久師の琴「融」や、茂山七五三師らの狂言「清水」とすすみ、金剛流の種田道一師のシテによる能「葵上」でもって全部の演目を終わり、九百人の観客は幽玄の美を魅了しました。



茶会

秋の上京

恒例の「秋の上京茶会」は、上京区文化振興会と上京区役所の共催で、大徳寺山内の黄梅院を会場として、十一月五日に行われました。秋晴れの中、裏千家の懸釜により六百人の区民や観光客で賑わいました。

茶会」は、上京区文化振興会と上京区役所の共催で、大徳寺山内の黄梅院を会場として、十一月五日に行われました。秋晴れの中、裏千家の懸釜により六百人の区民や観光客で賑わいました。



人権感覚について

■講師 藤田 敬一
岐阜大学教授

私は光徳小学校から松原中学、洛陽高校の出身です。私の同級生がまわりおりまして応援団付の話は初めてですが、今日は上京区のみなさんにお話しができるので喜んでおります。ぜひとも皆さんにお考えいただきたい点目は、この社会は大きな病にかかるので喜んでおります。

いざかっていけるのではないかということです。自分と自分の親しい人のこと以外は関心を持たないという人が非常に増えて来たんじゃないかな。

携帯電話の列車内の使用についてもJR西日本では一年前までは「携帯電話のご使用はまわりの方のご迷惑になりますので、ご遠慮ください」という使用は心臓のベースメーカーなどに影響をおよぼしますので「ご遠慮ください」といいます。今ではその後に「携帯電話の使用は心臓のベースメーカーなどに影響をおよぼしますので「ご遠慮ください」といいます。ところが最近は「ご迷惑になります」といつてます。一年前は可能性の問題だった。ところが今はバスも電車も、そして新幹線も「携帯電話の使用は遠慮してください」とはつきりいります。

私は一途になつたらどうしようもない性格がありまして、このあいだも私の真ん前で五十過ぎの女性が、JR奈良駅から、べちゃくちや喋っている。「やめときませんか」といつたら、ど

ういったと思ひます。「前の人があとけつて言うてるんで切るわよ」と、やめとけといふから切ると、どういうことですかね。このような人々、つまり自分と自分の親しい人以外のことは関心を持たない人が増えてきている。そういう中で人権問題が心に届くことは至難のわざに属します。

私がぜひともお願ひしたいことが二点目としてある。それは目を凝らし、耳をすましてほしいということ。自分のみわりに目を向け、そしてまわりの人には耳を傾けてほしい。そのことからしか始まらないと思うようになります。人間の視野は二三〇度あるんです。耳をすましてほしいということ。自分

でいると、いろんな人間の悲しみ、あるいは苦しみというものが、そこにうかがうことことができます。どうかお願ひします。全国のお母さん、食事の時、お風呂の時、五分でもいいのです。弱い人間をいじめるようなことは、人間としてするべきではないとお教え願いたいのです。

非常におさえた、お母さんの投書「息子は幸いご近所や学校の励まして、元気に今日も汗をかきかき養護学校に通つております」歩き方が面白いからといって、頭を殴り、倒し、しかも一生懸命話をしかけてくる少年を小児麻痺の連呼で、その声を消してしまった。この少年たちの行いは、決して少年たちの問題とは言ひ切れない。私たち自身が障害児に対する母親などの投書を読

ルビノのレディースプラン
2,800円(税・サ別) ●ご予約制

大好評!

HOTEL Rubino ホテル ルビノ京都堀川
〒602-8056 京都市上京区東堀川通下長者町
Tel.075-432-6161 / Fax.075-432-6160

のかということが改めて問われます。

三重原津の十八歳の女子大生の投書。

「大学四年間、無駄に過ごしたくない
と思ったので、障害児を介護するボラ
ンティアのサークルに入りました。あ

る日、車椅子を押して町に散歩へ出か
けたときに、二、三歳の子供にだだを

こねられて困っていました。お母さんに会い

ました。道の向こう

側で、お母さん大変

やねと一人で話をし

ながら、その前を通

り過ぎようとした時、

そのお母さんは、私

たちを指差しながら

言つたのが聞こえて

きました。いうこと

を聞かないとあんな

人になるよ、なんて

ことをおっしゃるん

ですが、子供の教育の前に親の教育、

大人の教育が大切ではないですか」大

学入学したての女子大生は怒って投書

してきました。

私はこの投書を見た時、とつさに思

い出したことがありました。私たちの

住んでいた下京区のすぐ近くに壬生寺

があります。ここは壬生狂言が有名で、



節分には必ず「カンカンデンデン」と演じられる。私の小さい頃は同時に見世物小屋が出ました。大きな泥絵で、ろくろ首とか、せむし男とか、「お代は見てのお帰り」男は入口でそう言つていました。怖いもの見たさの私も入つた。そうすると障害者が見世物にされしていました。横に立つていた男は節をつけて「親の因果が子に報い」と言つていた。私も、そして皆さんの中の多くの方も幼い頃に、障害は親もしくは祖先の悪行の祟だというふうに教えられたことがあります。最初に申し上げます。一つ目、噂を広げないでほしい。私たちは、どうしても人間の集団をひとくくりにしてしまいます。その時、認めもしないで、すっと乗らないようにしてほしい。誰かに代わってもらうことができず、誰かに変わることができない、かけがえのない一回限りの人生を送っているんです。だから噂を広めないでほしい。

私はこの投書を見た時、とつさに思いました。道の向こう側で、お母さん大変やねと一人で話をしながら、その前通り過ぎようとした時、お母さんは、私たちを指差しながら言つたのが聞こえてきました。いうことを聞かないとあんな人になるよ、なんてことをおっしゃるんですが、子供の教育の前に親の教育、大人の教育が大切ではないですか」大学入学したての女子大生は怒って投書してきました。

私たちのまわりに満ちていたわけあります。私は同和問題を勉強して四十二年にあります。その中でずっと考えてきたのは、同和問題というのは同和地区のないところにも同和問題があることを発見しました。それは、うわさの世界です。今から二十一年前に岐阜で奇妙な噂が発生した。女性がマスクをする道で男性に出会うと「あたしきれい?」と質問する。いいえと言うと、マスクを開ける、怖い、ギャーッですね。「口裂け女」の噂。この噂は、ものすごく早く全国へ広がりました。三人姉妹で交通事故に遭い、手術が失敗して精神病院から脱走したというふうになつていくんです。

精神病院から脱走したというふうになつていくんです。

最後に申し上げます。一つ目、噂を広げないでほしい。私たちは、どうしてでも人間の集団をひとくくりにしてしまいます。その時、認めもしないで、くるのです。

この講演は上京区民ふれあい事業実行委員会と上京区役所の主催により十二月七日にルビノ京都堀川で行われた人権月間の講演会を要約したもので

历史文字シリーズ

伝達浪漫

メソポタミア文明や楔形文字のそには、今も人々にロマンをあたえ、ハイスピードで時が変化しても伝達には心が大切である。

和光印刷株式会社

〒602-0012 京都市上京区烏丸通上御塗前上内構町
TEL.075-441-5408(代)

にしてしまうようなもの言いがあつた時に、「それは人間として愚かな言動ですよ」と穏やかに、丁寧に、じつくり相手に語つてほしいのです。

三つ目に、降りる人がすんでから乗るということを引き受けることです。みんな座りたいから乗るんです。しかし、

降りる人が済んでから乗るんだという生き方を選んだ時、生き方というのは人生に対する態度です。それを選んだ時にこそ、私たちは自分の人生を自分で決めていくという力がそこに生まれてくるのです。

ふれあい史蹟
ウォーキング

上京の名石をめぐる



数えて十回目となつた「上京区民ふれあい史蹟ウォーキング」は、十一月二十六日に上京区体育振興会連合会の主管で行われました。今回は「上京区の名石をたずねて」をテーマに水火天満宮の登天石、幸神社の猿田彦神石、岩神祠の三カ所をポイントとして、西陣の町家や同志社の煉瓦造りの校舎など沿道に残る多くの文化財を見ながら説明を受け、五キロ余りのコースを三百人の区民が歩き通しました。

日頃なじみの少ない史蹟に参加者は、改めて上京区の歴史の深さを感じました。

上京区女性会連合会の主管で、十二月十日に「ふれあい文化大学」として、「香」の歴史や色々な使い方などを学ぶ催しを西陣中央小学校で行ないました。香の老舗である松栄堂の畠正高氏を講師として、「香」についての理解を深めました。

日頃、馴染みの少ない世界だけに、六十名の参加者はそれぞれに香りをたしかめあいながら、風流の道にひたりました。



上京区文化振興会は上京区役所との共催で一月十七日と二十四日に、京都ブライトンホテルの教室で陶芸教室を開催しました。延べ四十人の参加者は陶芸家の指導のもと、二時間かけて茶碗や皿などの作品を作りました。

思い思いに土をひねりながら、焼き上がりの姿を楽しみにしています

と、参加者は語っておられました。



手ひねりに
焼上がりを想う
**陶
芸
教
室**

手作りを楽しむ ホビークラフト教室

上京区文化振興会では、ホビークラフト教室を開きました。十一月十五日を第一回としてルビノ京都堀川を会場に、講師の指導で、三十三名の女性が四回にわたって作品に取り組みました。

クリスマスリースやお雛さまなど、季節に応じた作品を作り上げました。それでお宅のアクセサリーとなっていることでしょう。



上京クイズ

前回の正解は、
相国寺の法堂です。

相国寺には数多くの建造物がありますが、最も古いのは慶長十年（一六〇五）に豊臣秀頼が再建した重要文化財の法堂です。桁行五間、梁間四間、一重もこし附の典型的な禅宗建築で、側面の花頭窓はその特色をよくあらわしています。

上京区民誇りの木に選ばれた仏殿の赤松林を前景に、どつりと構える法堂は相国寺の象徴といえます。

上京クイズは本誌の第二号以来、上京区内の国・府・市の文化財に限定して出題してきましたが、「市民しんぶん・上京区版」のクイズ「ここはどこ」と統合して、本誌のクイズは終わらせていただきます。

編集後記

○おかげさまで本誌も発刊以来十年、二十号を迎えることができました。これも区民のみなさんの後押しがあってのことと喜んでおります。

○読者のご要望を取上げながら少しずつ、その姿を変えてまいりました。次の十年は、より上京区民のためになる冊子に仕上げるべく努力したいと思っています。

○本号には上京区内にあります京都市埋蔵文化財研究所にお願いして、京都御苑の遺跡発掘の様子を紹介していました。今後もこのような企画を取り上げられるようになりますので御期待ください。



永年の信用と実績 真心のご奉仕

（葬祭センター）

公益社

本社 京都市中京区烏丸通三条下ル ☎(075)221-4000

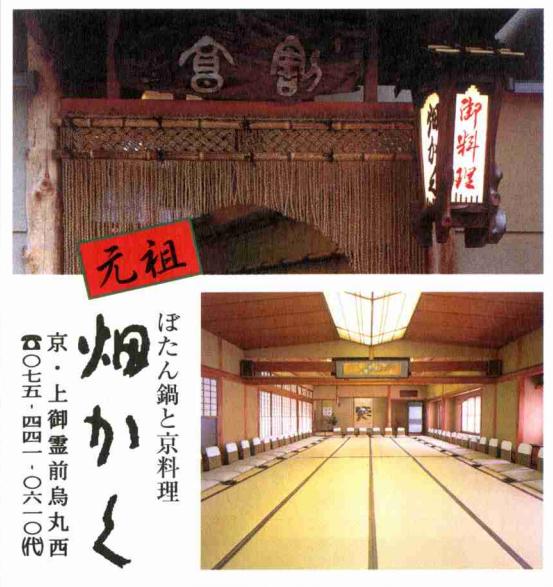
◆葬儀式場◆

公益社中央プライトホール/京都市東山区五条通大和大路 ☎075(551)5555

公益社北プライトホール/京都市北区紫明通堀川東入ル ☎075(414)0420

公益社宇治プライトホール/宇治市楓島町（文教大学前） ☎0774(20)0142

公益社滋賀プライトホール/大津市朝日ヶ丘1丁目12の5 ☎075(523)0042



上京区民の文化的情操を高めるのが 上京区文化振興会の使命です。

発足以来40年余、上京区民の文化人によって組織され、
文化振興に尽力してきました。

- 上京区在住の能楽・狂言の人間国宝の至芸が間近に見られる
上京区民薪能もすでに36回目

